

レビ記6-7章「祭司たちの奉仕」

1A 全焼のいけにえ 8-13

2A 穀物のささげもの 14-23

3A 罪のためのいけにえ 24-30

4A 代償のいけにえ 1-7

5A 祭司の分け前 8-10

6A 交わりのいけにえ 11-34

1B 穀物の添え物 11-14

2B 汚れた肉 15-21

3B 脂肪と血の禁食 22-27

4B 胸と右もも肉 28-34

7A まとめ 35-37

本文

私たちは合計五つの献げ物についての教えを読みました。全焼のいけにえから始まり、穀物のささげ物、交わりのいけにえ、そして罪のためのいけにえ、代償のいけにえ、です。6章8節からは、これらの献げ物を祭司たちがどのように受け取るのかについての教えです。これまでは献げる物、礼拝者の視点からの教えでしたが、祭司がこれらのいけにえを受け取る時にどのように行っていくのかを教えてください。

ここで忘れてはいけないのは、私たちは、神の家に仕える祭司であるということです。「I ペテ 2:4-5 主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが神には選ばれた、尊い生ける石です。あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。」祭司として、私たちは神に自分を献げることも必要ですが、神から受け取るということも、大きな奉仕なのだということです。

1A 全焼のいけにえ 8-13

⁸ 主はモーセにこう告げられた。⁹「アロンとその子らに命じよ。全焼のささげ物についてのおしえは次のとおりである。全焼のささげ物そのものは、一晩中、朝まで祭壇の上の炉床にあるようにし、祭壇の火をそこで燃え続けさせる。¹⁰ 祭司は亜麻布の衣を着て、亜麻布のももひきを身に着ける。そして、祭壇の上で火が焼き尽くした全焼のささげ物の脂肪の灰を取り出し、祭壇のそばに置く。¹¹ それからその装束を脱ぎ、別の装束を着け、脂肪の灰を宿営の外のきよい所に運び出す。¹² 祭壇の火はそのまま燃え続けさせ、それを消してはならない。祭司は朝ごとに、その上に薪をくべ、その上に全焼のささげ物を整え、その上で交わりのいけにえの脂肪を焼いて煙にする。¹³ 火は絶

えず祭壇の上で燃え続けさせなければならない。消してはならない。

全焼のいけにえについての教えです。これは個々人が主にささげる全焼のいけにえとは別に、イスラエル会衆全体のために献げている物です。一日中、火が消えることなくそこで献げていると、主は命じておられます。そこには、いつも、絶えず、主にお献げしている姿を見ることが出来ます。イエス様は、ご自分に枕するところがないほど絶えず神に、そして人に仕えておられました。そして、絶えず仕えてくださるイエス様に私たちは触れて、私たち自身もイエス様に従っていきたい、神に仕えていきたいと願います。朝起きても、昼仕事をしていても、そして夜寝る前にも主に献げていきたく願うのです。

そして全焼のいけにえを献げる時には、そのときのための亜麻布の服装があります。外に出て灰を捨てる時には服装を着替えなければいけません。聖所の中の服はその中だけで用いることによって、服を汚すことがないようにするためです。そして、灰もただ捨てるのではなく、決められたところで捨てることによって、灰も聖別しています。私たちの献身が、世のものと混じらないようにすることが大切だ、ということですね。世の価値観が、主に仕える時に入ってはいけません。

2B 穀物のささげもの 14-23

¹⁴ 穀物のささげ物についてのおしえは次のとおりである。アロンの子らは祭壇の前で、それを主の前に献げる。¹⁵ すなわち、その中から穀物のささげ物の小麦粉ひとつかみと油を覚えの分として取り出し、穀物のささげ物の上の乳香すべてと一緒に、主への芳ばしい香りとして祭壇の上で焼いて煙にする。¹⁶ 残りの分はアロンとその子らが食べる。それを種なしパンにして、聖なる所で食べる。それを会見の天幕の庭で食べる。¹⁷ それにパン種を入れて焼いてはならない。わたしは、それを食物のささげ物のうちから、彼らの取り分として与えた。それは、罪のきよめのささげ物や代償のささげ物と同じように、最も聖なるものである。¹⁸ アロンの子らのうち男子はみな、それを食べることができる。これは、主への食物のささげ物のうちから、あなたがたが代々受け取る永遠の割り当てである。それに触れるものはみな、聖なるものとなる。」

穀物の献げ物に対する教えです。祭司の大きな務めの一つに「食べる」ということがあります。「食べることが、なぜ仕事なのか？」と思われるかもしれませんが。けれどもそうなのです。ここでは、祭司が行っている食べる行為は幕屋の外庭の中においてであり、かつ男だけが食べるものであり、そして「最も聖なるものである」「永遠の割り当てである」と神が言われているように、完全に礼拝行為です。

これはちょうど、聖餐式と同じです。キリストの肉、そして血を表しているパンとぶどう酒を腹の中に入れることによって、私たちはキリストの裂かれた肉、そして流された血を信仰によって自分のものにしていきます。私たちは頭の中で十字架を理解するだけでは不十分です。それを「食べる」

という行為に表れているように、自分のものとして体験していく必要があります。イエス様は、「ヨハ 6:56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。」と言われました。

そして、これは一般のイスラエル人の穀物の献げ物で、献げた残りの物であることに注目してください。祭司は仲介者です。神から受けて、それを人々に分かち合っていく存在です。祭司たちは彼らの代わりに神のものを受けて、そして彼らに神の祝福を宣言していきます。私たちキリスト者も同じです。私たちはキリストにあるものを受け取ります。そして神からの分け前として受け取ったキリストを周囲の人々に分かち合っていくのです。

¹⁹ 主はモーセにこう告げられた。²⁰「アロンが油注がれる日に、アロンとその子らが主に献げるささげ物は次のとおりである。小麦粉十分の一エパを常供の穀物のささげ物とする。半分は朝、もう半分は夕方の方である。²¹ それを油でよくこねて平鍋の上で作り、粉々にして焼いた穀物のささげ物として携えて行き、主への芳ばしい香りとして献げる。²² 彼の子らのうち、油注がれて彼の跡を継ぐ祭司がこれを行う。それは主のための永遠の割り当てであり、完全に焼いて煙にしなければならない。²³ 祭司の穀物のささげ物はすべて完全に焼き尽くすべきであり、食べてはならない。」

一般のイスラエル人ではなく、自分自身が祭司に任命されるときに献げる穀物の献げ物についてです。このときは自分自身のためにささげているのですから、自分自身が仲介することはできないので、その穀物を食べてはいけません。興味深いのは、穀物の献げ物のうちで、平鍋で焼いたパンを献げることです。それは焼いた後に粉々にして主に献げます。祭司の務めを果たすことのできる人は、心が砕かれた人です。私たちの心が砕かれれば砕かれるほど、人々の弱さに同情することができ、神の恵みを分かち合うことができます。

3B 罪のためのいけにえ 24-30

²⁴ 主はモーセにこう告げられた。²⁵「アロンとその子らに告げよ。罪のきよめのささげ物についてのおしえは次のとおりである。罪のきよめのささげ物は、全焼のささげ物が屠られる場所、主の前で屠られる。これは最も聖なるものである。²⁶ 罪のきよめのささげ物を献げる祭司はそれを食べる。それを聖なる所、会見の天幕の庭で食べる。²⁷ その肉に触れるものはみな、聖なるものとなる。また、その血が少しでも衣にはねかかったときには、あなたは、そのはねかかった衣を聖なる所で洗う。²⁸ ささげ物を煮た土の器は砕かなければならない。青銅の器で煮たのであれば、その器は磨き、水ですすぐ。²⁹ 祭司の家系に属する男子はみな、これを食べることができる。これは最も聖なるものである。³⁰ しかし、その血を聖所での宥めのために会見の天幕に持って行った、罪のきよめのささげ物は、食べてはならない。これは火で焼く。

罪のためのいけにえを祭司が食べることについての教えです。30 節に書いてあるように、祭司

自身が犯した罪、またイスラエル会衆全体が犯した罪については、皮、肉などはみな外の灰捨て場で焼かなければいけません、一般のイスラエル人が献げる罪のためのいけにえについては、肉が聖なるものとなっています。

ここで強調されているのは、「主イエス・キリストは罪を負われたけれども、ご自身は聖であられた。」ということです。イエス様の上に全人類のすべての罪が置かれたけれども、この方自身は聖なる方であった、その内に罪の性質はなかったことを表しています。ここはとても大事ですね。主イエスは罪人とみなされましたが、実際は正しい人でした。そして、私たちが聖くなるための方法は、キリストの十字架を、そしてその鞭打たれた肉体を自分のものとするということです。「あなたの罪のために十字架につけられた」ということを、観念的にではなく現実に受け入れることです。

そして血は、罪をきよめるためだけの聖なるものです。神のみが受け取るものです。ゆえに、それが服に付着した時には、洗わなければいけません。その服は聖なるものですから、聖所から出ることなく、その中で洗います。土器は中にしみこんでしまうので、壊さなければいけません。青銅の器はごしごし磨きます。主のみが、受け取るようにしなければいけません。

4A 代償のいけにえ 1-7

¹ 代償のささげ物についてのおしえは次のとおりである。このささげ物は最も聖なるものである。² 代償のささげ物は、全焼のささげ物を屠る場所で屠る。そして、その血を祭壇の側面に振りかける。³ その脂肪はすべて献げる。すなわち、あぶら尾と内臓をおおう脂肪、⁴ 二つの腎臓と、それに付いている腰のあたりの脂肪、さらに腎臓とともに取り除いた、肝臓の上の小葉である。⁵ 祭司はそれらを祭壇の上で、主への食物のささげ物として、焼いて煙にしなければならぬ。これは代償のささげ物である。⁶ 祭司の家系に属する男子はみな、これを食べることができる。それは聖なる所で食べなければならぬ。これは最も聖なるものである。⁷ 罪のきよめのささげ物と代償のささげ物についてのおしえは一つである。代償のささげ物は、それをを用いて宥めを行う祭司のものとなる。

代償のいけにえについて、その献げる手順について5章に書いてありませんでしたが、ここに書いてあります。罪のためのいけにえと同じ手順、ということです。ただ違うのは、血を祭壇の角に塗るという記述がないことです。罪のきよめのいけにえでは、祭壇の角の血を塗りますが、それをしません。もう一つは、祭壇の土台ではなく側面に注ぐことです。全焼のいけにえや、交わりのいけにえと同じように側面に注ぎます。けれども、罪のためのいけにえと同じように、それが聖なるものであり、祭司が食べるということでは一つです。

5B 祭司の分け前 8-10

⁸ 祭司が、ある人の全焼のささげ物を献げる場合、献げた全焼のささげ物の皮はその祭司のものとなる。⁹ さらに、かまどで焼いた穀物のささげ物はすべて、また鍋や平鍋で作られたものはすべて

て、それを献げる祭司のものとなる。¹⁰しかし、油を混ぜたものや、乾いたままの穀物のささげ物はすべて、アロンの子ら全員のものとなり、等しく分けることとする。

全焼のいけにえは、そのすべてを焼くのですが、けれども皮は祭司のものとなります。そして穀物のささげ物については、小麦粉のみならず、焼いてパンにしたものも残りは祭司のものとなります。そのまま穀物の粒のままに献げたものに限っては、それをささげた祭司のものだけではなく、息子や娘含めて全ての人に分け与えられます。

このように祭司は受け取ることがある意味で仕事になっています。それは、彼らが生活の糧を外で得ていないという実的な理由もありますが、主から受け取っていくことそのものが彼らの務めになっているからです。私たちの務めも同じです。キリストから受け取っていくことがその務めなのです。私も、主から受けたものを分かち合っています。分かち合う前に受け取るのです。

6B 交わりのいけにえ 11-34

次に交わりのいけにえについての教えです。交わりのいけにえは、まさに神と人が同じものを食べることによって一つになるという大きな意味がありますから、ここで食べるということについて主は教えていますので、多くのことを語っておられます。

1C 穀物の添え物 11-14

¹¹主に献げられる交わりのいけにえについてのおしえは、次のとおりである。¹²もし感謝のためにそれを献げるのなら、感謝のいけにえと一緒に、油を混ぜた種なしの輪形パンと、油を塗った種なしの薄焼きパン、さらに、油を混ぜてよくこねた小麦粉の輪形パンを献げる。¹³感謝のための交わりのいけにえと一緒に、種入りの輪形パンを献げる。¹⁴そして、それぞれのささげ物から一つずつを取り、主への奉納物として献げる。これは、交わりのいけにえの血を振りかける祭司のものとなる。

交わりのいけにえにおいては、感謝のいけにえと誓願のいけにえがあります。感謝のいけにえは、単純に主が与えてくださったものを喜び、感謝することです。その時には穀物の献げ物も添えて献げます。興味深いのは、ここに「種入りの輪形パン」があることです。これは祭壇の上で焼くことはせずに、そのまま祭司が受け取りますが、種なしのパンを献げなければいけないという教えの中で唯一存在するのです。これは、神との交わりにおいて、それを献げている者が必ずしも完全にされているのではないことを表しています。神は知りつつも受け入れているという現実を表しているのです。

イエス様が天の御国の奥義の例えにおいて、良い麦の畑のところに悪魔が来て毒麦の種を蒔いた話をされました。それが育って、毒麦だと分かったのですが、しもべたちが「私たちが行って毒

麦を抜き集めましょうか。」と申し出たところ、主人は、「いや。毒麦を抜き集めるうちに麦も一緒に抜き取るかもしれない。だから、収穫まで両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時に、私は刈る者たちに、まず毒麦を集めて焼くために束にし、麦のほうは集めて私の倉に納めなさい、と言おう。」と言いました。(マタイ 13:24-30)

私たちの交わり、教会には毒麦もあるのだ、ということです。けれども、それが如実に明らかにされないうちに裁いて取り除いてしまっはいけない、ということです。それよりも憐れみによって受け入れていきなさい、ということです。けれども、それは罪を許容しているということではありません。それが明らかにされた時には取り除かなければいけない、ということです。

2C 汚れた肉 15-21

¹⁵ 感謝のための交わりのいけにえの肉は、それが献げられるその日に食べ、少しでも朝まで残しておいてはならない。¹⁶ もしそのささげ物のいけにえが誓願のささげ物、あるいは進んで献げるものであるなら、そのいけにえが献げられた日に食べなければならない。残ったものは翌日食べても差し支えない。¹⁷ いけにえの肉の残ったものは三日目に火で焼く。¹⁸ もしも、三日目にその交わりのいけにえの肉を食べるようなことがあれば、それは受け入れられず、それを献げる人のものとは見なされない。これは不浄のものとなり、これを食べる者はその咎を負わなければならない。

冷蔵庫で保存することもできない状態ですぐに食べなければいけないというのは、衛生上も必要なことですが、ここでは儀式的あるいは霊的な側面を話しています。感謝のいけにえは、その日のうちに食べなければいけないというのは、「いつも感謝していなさい」ということです。数日前に起こったことは感謝だけれども、今起こっていることは感謝できない、ということではないのだ、ということです。感謝は貯めておくことができません。その場その場で、自然発生的に心から湧き上がってくるものです。

そして誓願や進んで献げる物については、二日は取っておいて食べて良いことになっています。これは「私はこれこれのことをします」と言っているのですから、持続性を伴うからです。昨日そのように決意したことが、今日その延長で行っています。けれども、三日目には効力を失います。私たちは主にあって決意したことを、確認して、再度決心していきながら歩んでいかなければいけない、ということです。

¹⁹ また、何であれ汚れたものに触れた肉は食べてはならない。それは火で焼く。そうでない肉は、きよい人であればだれでも、その肉を食べることができる。²⁰ しかし、その身に汚れがあるのに、人が、主に献げられた交わりのいけにえからの肉を食べるなら、その人は自分の民から断ち切られる。²¹ また人が、どんな物でも汚れたもの、すなわち人の汚れや汚れた動物、またあらゆる汚れた忌むべきものに触れていながら、主に献げられた交わりのいけにえの肉を食べるなら、その人

は自分の民から断ち切られる。」

何か汚れたものに触れることによって自分が汚れるという教えは、11章以降に詳しく出てきますが、汚れた状態で交わりのいけにえは食べることができません。私たちの主との交わりには、汚れがあってはならないということです。主にある互いの交わりにも汚れがあってはならない、ということです。使徒パウロは、「エペ 5:3 あなたがたの間では、聖徒にふさわしく、淫らな行いも、どんな汚れも、また貪りも、口にすることさえしてはいけません。」と勧めました。

3C 脂肪と血の禁食 22-27

²² 主はモーセにこう告げられた。²³「イスラエルの子らに告げよ。あなたがたは、牛であれ、羊であれ、やぎであれ、そのどの脂肪も食べてはならない。²⁴ 動物の死骸にある脂肪や、野獣にかみ裂かれた動物の脂肪は、何に使っても差し支えない。しかし、決してそれを食べてはならない。²⁵ 食物のささげ物として主に献げられた、動物の脂肪を食べる者はみな、自分の民から断ち切られるからである。²⁶ また、あなたがたは、どこに住んでいても、鳥でも動物でもその血をいっさい食べてはならない。²⁷ いかなる血でも、これを食べる者はみな、自分の民から断ち切られる。」

脂肪と血を食べてはならないという強い戒めです。特に、死体は汚れているとみなされていますから、死体からの脂肪と血は、食べるものとしては避けなければいけません。これはすでに3章の交わりのいけにえの教えのところで出てきましたね。脂肪については「豊かさ」を表しており、豊かさは神のものであることを表しているからです。ただし、死んだ動物とか、いけにえの動物として使うことのできない獣の脂肪は主に持ってくることはできませんから、それは燃料に使うなど、食べる以外に用いてもよい、ということです。そして「血」については、もちろん「命の尊厳」を表していますから食べてはいけません。

4C 胸と右もも肉 28-34

²⁸ 主はモーセにこう告げられた。²⁹「イスラエルの子らに告げよ。交わりのいけにえを主に献げる者は、自分の交わりのいけにえのうちから、そのささげ物を主のところに持って行かなければならない。³⁰ その人は自分の手で主への食物のささげ物を持って行く。その脂肪を胸肉と一緒に持って行き、胸肉を奉獻物として主の前で揺り動かす。³¹ 祭司はその脂肪を祭壇の上で焼いて煙にする。その胸肉はアロンとその子らのものとなる。³² あなたがたは、自分たちの交わりのいけにえのうちから右のもも肉を、奉納物として祭司に与えなければならない。³³ アロンの子らのうち、交わりのいけにえの血と脂肪を献げる者が、その右のもも肉を自分の受ける分とする。³⁴ それは、わたしが、奉獻物の胸肉と奉納物のもも肉をイスラエルの子らから、その交わりのいけにえから取り、それらを祭司アロンとその子らに、イスラエルの子らから受け取るべき永遠の割り当てとして与えたからである。」

交わりのいけにえのうち、「胸」と「右もも」についての教えです。「胸」は「奉献物」として主にささげなさい、とあります。これは感謝を表していることとされ、「主の前で揺り動かす」とありますが、前後に動かすと言われていました。そして「右もも」は奉納物になり、それは上下に動かすと言われていました。賛美を表すと言われていました。「胸」は「アロンのその子」という一般的な表現から、アロンの家族すべてに分け与えられますが、「右もも」はその献げた人本人が受け取ります。

「胸」は心を表しています。主への感謝の思いを心から言い表す行為です。そして「右もも」は力を表しています。私たちが思いを尽くすだけでなく、力を尽くして主を愛することを意味しています。

7B まとめ 35-37

³⁵ これは、アロンとその子らが祭司として主に仕えるようになった日に、主への食物のささげ物のうちから彼らが受け取る分となった。³⁶ それは、イスラエルの子らから取って彼らに与えるようにと、彼らが油注がれた日に主が命じられたもので、代々にわたる永遠の割り当てである。³⁷ 以上は、全焼のささげ物、穀物のささげ物、罪のきよめのささげ物、代償のささげ物、任職のためのささげ物と交わりのいけにえについてのおしえである。³⁸ これは、主がシナイの荒野でイスラエルの子らに、主にささげ物を献げるように命じた日に、主がシナイ山でモーセに命じられたものである。

これは全体のまとめです。35-36 節は、6-7 章にあった祭司の受け取る分け前のまとめ、そして 37-38 節は 1-7 章にある全体のまとめです。37 節に「任職」とありますが、次回の学び 8-9 章に実際の任職式の話が書かれています。